

MM009 一休和尚『諸國物語圖會』四冊「京都書林／尚書堂藏板」、

一休丹波路へおもむき給ふ。ある山里に二三日とつりう有けり。在處のものゝ申けるハ。いかにたびの御僧。この郷境に二町ばかり南郷に天台の寺の候が此寺夜るになれば。すさまじき家なりして。色々ふしぎなる事どもあるに由り。我すまんどいふ坊主なし。其子細八去々年たびの僧たのミおきたるに。去方より三年忌の卒塔婆をたのまれ。此坊主の出たるが。其より時ならず火焰もゆる。其火の高き事一丈ばかりあり。郷内八申に及ばず。りん郷式三里の外までも其かくれなし。されバ其坊主も。さま／＼經多羅尼を修しとむらひしかども。しるしなれば。いつの頃か此事はづかしくや思ひけん。夜ぬけて行方しれず。故にこの里の女わらべ。よるにもなれば。恐れて門せども出られず。其のち或坊主を入置しに。是も三日とこらへずして又出られ其よりわれ住せんといふひじりなれば。おのづからあき寺となりくちはてんこそ惜ううへ。是はいかなる事にてやうたん。一休聞給ひてさやうの事ハいかほどもある事也。それは別の事にてハあるまじ。定て卒塔婆の文字の書ちがへしゆゑならん。それがし書なほし参たせなバ。別の義あるまじ。さらバ同道申さんとて。くだんの寺に行見給へバ。法花經要品なり。あんのごとく文字の一字ちがひあり。あらため出直し給ふ。其文字にいはいはく。十法仏土中唯一乘法無二亦無除仏方便説とかき。これを立おかれて。かさねて子細八あるまじとて。和尚ハそれより西国方へこゝろざし給ふ。其後は此寺無事になりにけり。ひとへに和尚を神仏の化現なりといはぬものなかりけり。「巻四・16ウ ~ 17才」

一休和尚高野山へ登り給ひ。四方の山々をながめてさても聞しより尊きけしきかなとなかめおはしけるに。高野ひ

じりとも立いできて。一休を見ていかなる人ぞと尋ねければ。愚僧は名もなき道心者にて侍るが。此山はじめて一見仕候へバ。余り風景がおもしろく侍れ八こし折の詩か哥か一首つかまつらんとぞんじつく／＼として侍るとのたまへば。ひじりとも一休と八中々おもひがけねバ。しほらしき事をいふ御房かな。電わざにいえるめくらの垣のぞき。すぐちの嘯ひびくてなくさむとや。その身八かゞミてこそとて。うそさむげなる影ふりにて。衿八此山の名産高野がみそりの刃よりもうすき糸り付にて。細首のいとあぶなき体にて詩歌を案づると八いできたりと。口々にいやしめ笑ひけるに。一休耳にもかけず空うそふきておはしけるがやう／＼一首仕りたり。硯紙たま八れと申されければ。何一首出来たるとは。さら八拜吟仕るべしとうち笑ひ。硯紙を出しければ。一休筆をとり。彼東坡居士が經山寺の詩を山がたに作りしを例として

山秋葉落

此山形の詩のよミやうハ

山春開花發空

山高近二都卒内院一

山迎連峰報下佛心亦

山閑表二華蔵世界一

山高近二都卒内院土上進空

山迎連峰報二佛土一

山閑表二華蔵世界地醒寂

山平幽臨化佛惱亦

山平幽臨化佛惱亦

山春開花發心進

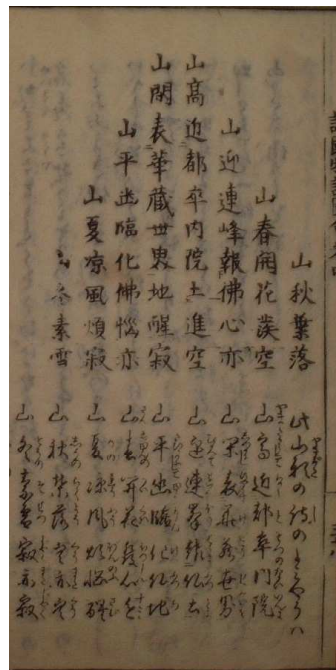
山夏涼風煩寂

山夏涼風煩惱醒

山冬素雪

山秋葉落空亦空

山冬素雪寂亦寂



かくの電そくじく即時ふでに筆をとりさら／＼と認したゞめ給へバ。一山のひじり大におどろき。さても形容かたちに似合にあざる見事ミことなる筆跡ひつせきといひ。又め目なれぬ詩しの体ていかなと明あきたる口くちをふさぎかねさて／＼先刻せんこくは皆々みなくよしなき事ことどもをいひて。御僧そうをばづかしめる事ことかへす／＼はづかしうこそ。いかなる人ぞ御名なをなのり給へと口々くちくちに申しければ。其詩しの下したに御とのこへは。まことに小文字こもじ候なにいぢが何一なにいちとか申ぞとたづねける。其中なかにに一人のひじり眉まゆをしばめ。此詩しの筆跡ひつせきをよく／＼見るに。京紫みやこむらさきの野のなる一休和尚いっしゅうわうの書かきなり。さるから一いつとしるされたり。さればこそ曲者くせものなりとふり歸かへり見るに和尚わう八彼方やっぺかたへ下向げこうし給ふ。ひじりたちそれをとゞめまゐらせて。過言くわごんをあやまれとてはしり付つきて引とゞめ。一休和尚いっしゅうわうとも存ぞんぜずして段々だん／＼に無礼ぶれいを申たり。御免ゆるしありて先々まづ／＼坊中ぼうちゆうへ入らせ給へとゐんぎんにのぶるに。一休いや／＼何なにも改かへはり給ふべき事に八さら／＼なしとて。きげんよく坊ぼうへ歸かへり給へバ。ひじりたちさま／＼馳走ちさうをまゐらせける。され厚あつく礼れいをのべ下向げこうし給ひける跡あとにて。一人のひじり申やう。かゝる名僧めいさうまた登山とうざんし給ふ事ことまれなり。願ねがく八大師はちだいしの御影みえいに贊さんをたのミ申こゝろハいかにといふに。いづれも尤もつともとはじ。さらハ今いま一ひとたびよびかへしまゐらせんと。又また追おつかけ奉ほうるに。一休いっしゅう八何事はつなにことにやと仰おほるるれば。しか／＼のよし申に。一休いっしゅうわらひ給ひて。それほどの事ことまた立歸たちかへらずともなる電也でんぜ。御影みえいを急いそ持もちきたられよとて。道みちなる茶屋ちややに休やすておはしける。人々ひとおどろき大師だいしの贊さんを請こふに。立たちながら思案しあんもなくるゝ事こと聞きより大博たいはく学がくの祖師そしかなと。舌したの根ねをふるひけり。初はつ大師だいしの御影みえいをもち來きりければ

弘法こうぼう大師だいし活い佛ぼつ 死しねば野のはらの土つちとなり

と一筆いっぴつにさら／＼としたゞめ給ひて下向げこうし給ふ。人々ひとふかき事こともありといそぎ登山とうざんして学匠がくしやうに見みせければ。格別かくべつのおどけ事ことありしかバ。またひじりども口くちを得えふさがざりけるとなり。「巻四まきしよ 37 39ウ 終、詩は38ウ」

此の「人」巻に「般若心經抄圖會」を収録する。

MM040 一休和尚抄『般若心經抄圖會』一冊(二五丁)「京都書林/尚書堂藏板」、「天保十五辰(1844)年八月 三條通柳馬場東へ入町/京都書林 尚書堂 堺屋仁兵衛板元」

旧蔵者「小室氏家蔵珍」の朱印有。二五丁の巻頭箇所に「古書賣買/鳳書房/目黒駅都電通り TEL(44)8364」の貼紙有。

摩訶般若波羅蜜多心經 宗純抄

是八天竺のことバナリ。摩訶と八大といへるこゝろ也。大といへる心をしらんとならバ。先わが小さきこゝろをつくすべし。小心と八妄想分別なり。まうさう分別あるゆゑに。我と人とのへだてをなし。仏と衆生のへだてをなし。有無をつゞて迷悟をわかち。是非善惡の隔あり。是を小心と八いふなり。この心を探せば。われ人のへだても。佛と衆生の隔てなくして有無の心もまよひといふ事も。さとるといふことをも。皆平等にして。さらにへだてある事をしらず。これを大心といふなり。此意八虚空のかぎりなきがごとし。是則一切衆生のわれ／＼の上に。元来そなハリたる本性なり。しかれども。八妄想分別の小さきこゝろにおほはれて。此大心を見る電をしらず。色々わけへだての心あるゆゑに。有無の二ツにまよひ。生死のふたつに隔をしゆ／＼の顛倒迷妄するなり。般若と八知恵といへる義なり。このはんにやの知恵と八。凡の思へる分別才覚ありて。小ざかしきをいふにあらず。この分別才覚は世間の知恵なれば。小智は大智にあらずして。世知弁聰とて。佛道に入電をしらず。さるによりて小智八菩提のさま

たげといへるも。此心をもつていふなり。眞実般若の知恵といふ八。妄想分別をはなれて。大虚空の如なるをいふ也。三世の諸佛その外もろ／＼の知識たちも皆この知恵をもつて無上菩提をさとりたまふなり。無上菩提八分別まうざうの及ばざる處なり。去程にこの般若の智は生死の苦界をわたる船にたとへたるなり。波羅蜜多と八彼岸にいたるといふ心なり。彼岸と八かの岸とよめり。凡ハまよへるゆゑに生死苦界をわたる電をしらず。生死流轉するを此岸といふなり。此岸と八この岸とよめり。ぼさつ八般若の知恵によりて。一切の諸法八みな空にして。元より生死もせず。滅しもせずといふ道理をさとりて。はんにやの船にのりて。生死のくがいをわたり過て。不生不滅のねはんの岸にいたるを彼岸と八いふなり。別ねはん八生せず滅せずといふ義なり。こゝにいたるを極楽といふなり。凡の種々と無量の苦をつくる事八生死のふたつに以てなり。生を願ふては樂を好み。死をいとひて八苦をつくる。たのしみを求めてもあたはざれば。樂もくるしミとなる。さるほどに般若の知恵をもつて。自心八もとより空にして生せず滅せずひつきやうなりと悟れば。生死をいとふべき事もなく。樂もなく。是を眞の極楽といふなり。こゝにいたるを彼岸にいたるといふなり。至るといへ八田舎より京へのほるやうの事にあらず。一念生ぜざれば。其立處すなハチ西方極樂なり。あるひは自心の外に極樂をもとめなばいよ／＼遠く十萬億土をへだて。終にいたる事あたハす。自心すなはち仏なる事をさとれば。阿弥陀をねがふに及ばず。自心の外に浄土なしかくいふもまた求むべからず。自惑をもつて自心をもとむる道理なきによつてなり。〔3才 迄〕

04才 総勢十二人の仏教和歌十四首有り。

後京極摂政・同、参議雅経・同、師惠、大僧正忠性、見性法師、頓阿法師、法皇御製、為家、慈鎮、上東門院、素性法師、慈覚大師

04ウ 釈迦佛に對面する僧侶と侍僧四名の図繪。

05才 觀自在菩薩
くはんじざいぼさつ

行深般若波羅蜜多時
ぎやうしんぱんにやはらみったし

06才 照見五蘊皆空
せうけんごうんかいくう

07才 度一切苦厄 といふなり
どいつさいくやく

07ウ 08才 図繪 西行法師ノ江口といへる處にてノ行？宿をこひノけるにゆるすノけしきなかりノければ。世中をノいとふまでノこそノかたからめノかりの宿をノをしむ君ノかな。

かへしノ家を出し人としノきけはノかりの宿に心とむなとノおもふばかりぞ 江口ノ遊女。

一休和尚 堺の浦へ御越ありしとき旅宿を宿せる處にノうつくしき女あり。其女一休なる事をしりて一首ノよみて奉る

山居せ八深_≡やまの奥にすめよかしノこノハうき世のさかひせきそ

一休が身を八身ほとにおも八ねはノ市も山家もおなし住家よ

とそしたノものならずと思しめしいかなる女ぞと尋ノ給へ八あれこそ人にしられたる地獄といへる遊女よとノ申上げれ八和尚其まノ

きノしより見て恐ろしき地獄かな

返し

しにくる人乃おちぎる八なし 遊女 地獄

08才 舍利子
しゃりし

是は佛の八万人乃大衆の中にて。智恵第一の弟子なり。さるによつて。大衆たちの為に。惣の名代に。仏にむかひ舍利子法をとひたてまつり。答をせらるゝなり。依て佛。色不二の御法をときたま八んとて。其名をよび出してつげ給ふなり。

08 才 色不異空。空不異色。色則是空。空則是色。受想行識。亦復如是。

色と八。地水火風のかりに和合せる四大色身なり。かたちの有ものを色といふなり。容あれば目にそのいろ／＼見ゆるものゆゑ。色といふなり。今この四大色身のかたちある八。元来空のかたちなきところより。生ずる程に。色身は空にことならずといふ義なり。さるほどに此色身まことに有物に似たりといへども。夢の如にて。

畢竟空なり。しかるに凡夫八まよひて。この真空の実相にそむひて。空妄の色身をまことに有ものなりと思ふによりて。生をこの三死をまぬがねず。故に仏是をあはれミて。此色身も元来不生不滅の真空があらはれたる物なれば。

色も空にことならずと説給ふなり。さて此空といふものも。色がめつして空となりたる程に。空も色に異ならぬぞ。

かくの如くいふも又色と格別なる物を。一ツになしたるやうにして。へだてがあるに似るあひだ。其色空の二見をばなれしめんが為に色則是空空則是色なりと説給ふなり。則といふ八やがてといふ心なり。色の當躰が其まゞやがて空なり。空の當躰がそのまゞ色なり。空をはなれていろなく。色をはなれて空なし。水と波のことし。波すなはち水なり。水すなはち波なり。さらに二つある事なし。たゞ一心実ばかり。これは先の五蘊のうちの色蘊乃一つをあげて。空にことならずときたまふなり。さればのこりの受想行識の四蘊も色蘊のごとく。皆空とことならぬといふ義なり。色蘊乃一つをもつて。残りの四蘊もしるべし。ひつきやう皆空なり。

續古 古もいまもか八らぬ月かげを雲の上にてながめてしかな 後嵯峨院

聞人もはるかにこれを仰げとて空にぞ法をとく聲八せし 法性寺入道

新後撰 色も香もむなしき物とをしえずバ有を有とや思ひ果まし 鷹司院

金葉 いろもかも空しと説る法なれど祈るしるし八有と杜きけ 撰政左大臣

新古 色にのミ染し心の悔しきをむなしと説る法のうれしき 小侍従

詠集 はるの花秋のもみちのちるをこそと色八空しき物にそへける 俊成

草庵 雲晴てみとりに晴る空ミれバ色こそやかて空しかりけれ 頓阿法師

拾玉 天の原思ひかゝらぬ雲の上もまことの道乃宿となりぬる 慈鎮

續拾 春秋の花もみぢもおしなへて空しき色ぞ誠也けり 大僧正道玄

續千 くまもなき月をうつしてすむ水の色も空にぞか八らさりけり 瞻西上人

續古 露わくる花すり衣かつかて八空しとミゆる色八ありけり 保生法師

續千載 うけがたき身をいたづらになすもの八後の世しらぬ心也けり 平政長

10ノ15才 舍利子。是諸法空相不生不滅

10ノ15才 不垢不淨不增不減

10ノ15ウ 是故空中無色無受想行識

10ノ15ウ 無眼耳鼻舌身意

16才 無色聲香味觸法

16ウ 無眼界乃至無識界

17ウ18才 花見酒宴遊興の図絵

18ウ 無々明亦無々明盡

18 ウ 乃至無老死亦無老死盡

20 才 無苦集滅道

20 ウ 無智亦無得以無所得故

20 ウ 菩提薩

21 才 依般若波羅蜜多故心無罣碍

21 ウ 22 才 月夜獨吹橫笛景の図繪（右端に寛嶺（花押））

22 ウ 無罣碍故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃

といふ八真実想の上に八。元來生滅なきゆゑに。生死の恐れある事なし。顛倒想と八。一切の有為のほう八

夢のごとくまぼろしの如くにして。実にあることなし。しかるを「ほんぶ」は迷ひて実ありに有とおもへる八。あだな夢をまこ

ととおもへるがごとし。是てんどうむさうなり。若一念空するときいっし一法も得べきなし。是則遠離なり。究竟とは。

きはまりつきたる義なり。万法みなねはんを至極とするなり。ねはんと八不生不滅のところなり。圓滿清淨の義なり。

清淨と八空の異名也。

22 ウ 三世諸佛

三世とは過去現在未來をいふなり。佛と八かくしゃと一切有情みな覺しやうをそなへたり。迷ふがゆゑに

衆生といひ。さとるを佛といふなり。自心の外ほかにほとけなし。人々自心即仏なれば。是を成佛といふなり。三世と

いふも遠き事にあらず。前ねんすでに滅したれば。過去後ねん未しやうぜざる八。みらい其中間のすでおこりたる

當念八現在なり。過去佛げんざい身。げんざい佛。未來仏なり。過去心不可得。けんざいじん不可得未來しん。不可

得なれば。たゞ一念一佛にして。二心二佛ある事なし。不去不來三世常住なり。

23 才 依般若波羅蜜多故

23 才 得阿耨多羅三藐三菩提

六字を八無上成等正覺といふなり。この六字を。則人々本来ぐそくしたる真性をいふなり。佛を覺しやうといふも此本性をさとの故なり。一切のもののこの真性にこえるまで平等にして仏にあつても増す。事もなく。衆じやうに有てもへる事なく。ひとしく平らかに。行わたりて。かけずあまらずミな備たる故に成等といふ。さてこゝにいふ。こゝろは菩薩ばかりはんにやによつて修行して。ねはんにいるのことならず。三世諸仏も皆はんにやによるが故に。此上の妙道を成就したる也といへり。

23 ウ 故知般若波羅蜜多是太神呪是大明呪は無上呪

24 才 是无等々呪

24 才 能除一切苦真實不虛

24 ウ 故說般若波羅蜜多呪

24 ウ 即說呪曰。揭諦揭諦。波羅揭諦。波羅僧揭諦

25 才 菩提娑婆訶

是佛道成就のところなり。

御集 おろかなる心のうちを尋ね見よ外にほとけの道なれば 後鳥羽院

千載 世間は皆ほとけもおしなへていづれの物と分けはかなき 花山院

玉葉 さまざまに千との艸木の種八あれとひとつ雨にぞめぐミ初ぬる 紫徳院

新葉 長き夜の夢路乃雲八晴ねどももとの光八ありあけの月 御製

續古 世を治め民をたすくる心こそやがて御法のまこと成けり

中務親王

續後撰 くもりなくむなしき空に澄月も心の水にやどるなりけり

素覚法師

新古 阿耨多羅三藐三菩提の仏たち我たつ杣にめうがあらせ給へ

傳教大師

風雅 出るとも入とも月を思八ねは心にかかる山の端もなし

夢想國師

新千 聞わくる心のうちのまことこそをしえによらぬさと成けり

権僧正桓覺

夫木 心を八いかなるものとしらねども名を称ふれば仏とぞなる

一遍上人

水鏡 夜もすがら仏の道をたづぬれば我心にそたづねいりぬる

一休和尚